

第一次「琉球処分」一〇〇周年糾弾!!

日本帝国主義の沖縄植民地「併合」Ⅱ琉球「処分」から満一〇〇年の三月二七日を迎えて、われわれの心は怒りとくやしきでいっぱいである。それは日帝がこの一〇〇年間に沖縄と沖縄人民に対して行なってきた侵略反革命歴史に対する憤激であり、いまだにその反革命侵略を粉砕しえざにいるわれわれの力のいたらなさに対するくやしきである。

沖縄の過去一〇〇年間の歴史は、ヤマト帝国主義の苛酷な植民地収奪の下、沖縄と沖縄人民が差別され迫害され、ソデツ地獄に叩き落とされ、「皇軍臣民」への同化を強要されて、アジア人民に対する侵略反革命の尖兵として狩り出され、あげくのはてに、日帝本国防衛のための「捨て石」とされ「皇軍」に虐殺され、日帝敗戦後は、米軍の専制支配下に呻吟し、アジア反革命侵略戦争の軍事基地へと転化させられ、七二年五月、日帝の再「併合」(Ⅱ第二次琉球処分)以後は、日帝侵略資本のエジキとされてきた苦難の歴史であった。そして、今、日帝は奄美、金武湾、多良間へのCTS建設攻撃にみられるように、すさまじい勢いで、沖縄の海、大地を殺し、沖縄人民の生活を破壊しつくそうとしている。

われわれ日帝本国人民は、これまでの一〇〇年間、天皇制イデオロギーに深く侵され、沖縄人民のこの苦悩と怒りを共有せず、沖縄人民とともに日帝の沖縄侵略攻撃に対し、闘いできていなかった。そして、そればかりでなく、かつてわれわれの祖先は「皇軍兵士」として、直接沖縄人民を虐殺し、沖縄人民を犠牲にすることで自分は生きのびた。そして今またわれわれは沖縄人民の犠牲の上にたつ日本の「平和と繁栄」の中で成長し、日帝が沖縄の大地と海を荒らしまわっているのを許してしまっている。

われわれは、このような歴史的現在の反革命史とは、はっきりと訣別しなければならない。

東アジア反日武装戦線は、日帝の支配下に組みこまれ侵略の尖兵となることを拒絶し、かつて東アジア人民に向けた銃口を日帝中樞に、天皇、帝国主義ブルジョアジーに向け、日帝中樞を武力攻撃するという具体的な戦闘を通して東アジア人民の反日武装闘争を復権、継承し、彼らの戦いと合流するための闘いの第一歩をふみ出した。われわれは戦いの中で、日帝の公安秘密警察に逮捕され、日帝監獄に囚われ、沖縄人民の反日闘争に込められた闘いをなしていないことを痛苦に自己批判しつつも、沖縄人民の一〇〇年の怨念と怒り、サツマ侵略以降三七〇年の間に沖縄人民の心の底に焼きついた反日の魂、そして沖縄解放にむけたたたかでおおらかな闘いの心、闘いの喜び、勝利への確信を共有したいと思っている。沖縄人民の「海と大地と共同の力」を求める反日の闘いの中にこそ、誰もが慈しみあい、助けあい、わかちあう人間のもっとも人間らしい姿、人間と自然がともに一体となつて生きる未来を見出している。

われわれは、人と人、人と自然の共存関係をふみにじる資本の論理、近代文明の下にくみこまれることを断乎として拒絶し、「イチムシグアとの共存関係」をめざすウチナンチューの反日魂に学び、帝国主義日本人としての反革命性、侵略者性、寄生虫性を自己否定し、ウチナンチューとの真の連帯、団結を求めて闘いぬいていく。いかに日帝監獄の鉄格子と厚い壁にこの身はさえぎられていようと、この熱い心は反日、反CTSを闘いぬく沖縄人民とともにあり、日帝の腐った腹ワタである監獄の中から、反日ののろしを上げつけ、最後の最後まで屈することなく闘いぬいていくことを誓いたい。

金武湾を守る会の皆さん ガンバレ!

CTS建設阻止!

日米軍事基地粉碎!

日帝の沖縄植民地化攻撃粉碎!

沖縄解放!

東アジア反日武装戦線は勝利する!

一九七九年三月二七日

東アジア反日武装戦線KF部隊(準)

6.23侵略と差別を許さない沖縄集会へ向けて

日帝の沖縄植民地化攻撃の頂点としてあつた沖縄戦から三四年目の6・23を迎えて戦犯天皇ヒロヒトを頂点とした日本帝国主義者共に対する限らない憤りと、沖縄人民への熱い連帯の心をもって、東アジア反日武装戦線K.F.部隊（準）より、連帯のアピールを送ります。

日帝はサツマの侵略より沖縄戦へと至る植民地支配の中で、すさまじい搾取、収奪によって、沖縄の農漁業を破壊し、共同体を解体し、沖縄人民を沖縄から叩き出し、日本国内の最底辺労働力として、あるいは中南米、中国東北部（満州）、東南アジア、南太平洋諸島への侵略の尖兵として狩りたてて肥大化し、日帝の危機に際しては、沖縄を「捨て石」としていけにえにすることによって生きのびてきました。しかし、この思うだにぐやしい憤激にたえない沖縄戦へと至る道は、決して過去のものではなく、より悪質、巧妙な形で現代的に進行しています。沖縄戦は、日帝の同化攻撃に屈服していく道が、沖縄人民をして、アジア人民を始めとした被植民地人民に敵対する侵略反革命の尖兵にしたであげていくものだけではないことだけでなく、沖縄と沖縄人民に対する死の強要だということをはっきりと示しました。

現在、海洋博を跳躍台として沖縄に対する日帝の植民地化攻撃は、加速度的に進行しており、日帝反革命軍——米帝反革命軍一体となった軍事演習は、ますます活発化しており、基地機能は強化され、C.T.S建設等にみられるように、日帝は、沖縄をオノレの軍事侵略最前線基地として再編しようとしています。このような状況下にあつて、日帝本国人であるわれわれの沖縄人民に対する責務は、まずもって、日帝の沖縄植民

地化攻撃を阻止する闘いを、われわれの生活の場である、日本国内において闘いぬいていくことでなければならぬと考えています。そして、それは沖縄人民との共同の敵である日本帝国主義の心臓部に対する断乎たる反日（武装）闘争を、沖縄人民の犠牲の上にあぐらをかきつつけてきた日帝本国人としての自己批判実践として闘いとおっていく、ということであると思います。

今日の状況は、沖縄人民の未来が、日帝の同化攻撃、植民地化攻撃と対決し、日帝の植民地化攻撃にさらされている東アジア人民を初めとした被植民地人民の反世界帝国主義闘争・反日闘争に呼応し、結合、合流していく闘いの中にしかないことをますますはっきりと示してきています。われわれもまた「善良なる日本人」として、日本帝国主義の末端にくみこまれることを断乎として拒絶し、全世界の被植民地人民の反世界帝国主義闘争・反日闘争に事実行為をもつて応え、合流していくことによって初めて、われわれ自身が帝国主義抑圧民族（国民）としての呪縛から解放され、日帝支配階級による搾取・収奪から解放され、沖縄人民、そして全世界の被抑圧人民とともに人類同胞として生きる道が拓けてくるのだと考えています。

人間の自然に対する支配を止揚し、自然と人間との一体的共生に生きる原始共産制社会の復権にむけた反日闘争の戦場で反C.T.S、反基地闘争を闘う沖縄人民と必ずや出会いの熱い抱擁を交わす時がくるであろうことを確信しています。いや、そうなるように闘っていきます。「鉄の暴風」さえも殺すことのできなかったという沖縄の美しい海を殺しつくそうとしている日本帝国を撃滅する闘いを沖縄人民、反日兵士・反日人民の共同の力でおし進めていきましょう！

ともに闘わん！

一九七九年六月一八日

ポリを殺った仲間の闘いに続き

寄せ場叛乱の陣型を作っている!!

一九七九年六月一二日 東アジア反日武装戦線K.F.部隊(準)

ヤマの仲間たち! 全国の寄せ場の仲間たち!

6月11日、ヤマの労働者が、マンモス交番のポリ公を刺し殺したというニュースを、オレたちは、獄中で聞いた。なぜ、その労働者がマンモス交番のポリ公を刺し殺したのか、その具体的理由をオレたちは知らない。しかし、ヤマの労働者がマンモス交番のポリ公を刺し殺したという事実からだけでも、オレたちは、その労働者の熱い思いを理解することができる。

市民社会からは「日雇労働者」とさげすまれていたヤマの労働者は、労働現場では、土建資本(元請―下請―孫請)に搾取され、また手配師やクザにもピンハネ(中間収奪)され、寄せ場ではドヤ資本にデズラを巻き上げられ、日常的にポリ公どもに目の仇にされている。

現場で、樺心の暴力や賃金未払に抗議し、謝罪や補償を要求すると、必ずポリ公どもが介入してきて、ヤマの労働

者の正当な戦いを弾圧する。マンモス交番のポリ公はヤマの労働者が、ただマンモス交番の前を通っただけで、イチヤモンつけてボックスに無理矢理つれ込み、よってたかつてリンチを加え、ほっぽり出す。そうやって、国家権力の恐ろしさをヤマの労働者に植えつけ、ヤマの労働者の叛乱を封じ込めようとしているのだ。

ところが、往々にして、土建資本や手配師やポリ公の搾取・収奪・抑圧を受けていながら、ヤマの労働者は、その抑圧を、土建資本や手配師やポリ公に向けてはねかえすのではなく、仲間うちのケンカに転化したり、日本人から差別抑圧されている朝鮮人やアイヌに向けてしまう。また、土建資本や手配師やポリ公にやられても、やり返さず、泣き寝入りしてしまう。6月9日、マンモス交番のポリ公を刺し殺したヤマの労働者はこうした負の状況を打破して、ポリ公に対する日頃の怨みを晴らし、まさに殺るべきテキ

に對して、確実に殺り返したのだと思う。

オレたちは、このような戦いの方向を支持する。日本帝國のポリ公は、どうもこいつも、特に、朝鮮人に対して根深い差別感をもっており、骨のズイまで植民地主義に犯されている現代の皇軍兵士である。こういうポリ公どもをぶち殺す戦いは、全くもって正義の戦いだ。

ヤマの労働者も知っている間組という独自の土建企業は、マラヤに侵出して、現地政權からテメンゴール・ダム建設を請負い、工事をやっていた。マラヤの武装勢力は、この工事を、マラヤ人民の利益に反する反革命工事であると糾弾して、一九七四年一月九日、間組を武装攻撃し、その結果、間組社員の家族が一人死んだ。

オレたち、東アジア反日武装戦線の三部隊「狼」「大地の牙」「さそり」は、このマラヤの武装勢力の間組攻撃を、オノレたち日帝本國人への戦闘指令として受けとめ、一九七五年二月二八日、間組本社6階の海外事業部、9階の電算機コンピュータ室、大官工場の三カ所を爆破攻撃した。さらに連想的に、間組の戸江川作業所も爆破攻撃した。

ところが、間組は、内外の武装攻撃にもかかわらず、テメンゴール・ダムの工事を続行し、その上、マラヤの武装勢力の攻撃によって、間組社員の家族が死んだということ

を口実にして、最近マレーシア政府から二〇億円とか三〇億円とかのカネをばったくった。このカネは、もともと、マレーシア政府がマラヤ人民からばったくったカネだ。要するに、間組は、マラヤ人民から収奪したのだ。間組は、ころんでもただでは起き上がらないタトエのごとく、エグイ収奪をやっている訳だ。マラヤに侵出して収奪活動をやっている日本人は、間組の社員であるが、その家族であろうが、マラヤ人民からみれば侵略者であり、殺されて当然だ。なにが補償金だ。ふざけるな。日帝の侵略企業間組こそ、マラヤ人民に血償をつぐなえ!

マラヤ人民の間組攻撃に應えて、間組を攻撃することこそ、オレたち日帝本國に生活しているものの責務だ。オレたちは、被植民地人民の戦いに應えて、日帝の中樞を形成している侵略企業を攻撃することで、被植民地人民を踏み台として生活してきた日帝本國人としての寄生虫性を自己否定し、全世界の、被植民地人民の戦いに合流していかなければならない。オレたちはこのように考えている。

間組の現場をメタメタにガタクロー! 間組の現場カントクをいってこまそう! 間組の現場で手抜き工事をやったらう! 間組の現場作業を妨害し、間組に損させよう! 反日武装闘争と共鳴し合う、間組現場からの大衆叛乱で、マラヤ人民の戦いに呼応しよう。間組を防衛するポリ公をセン滅しよう。日本帝國を撃ち滅ぼす反日人民戦争に志願しよう。

同志友人たち

——そして山谷・釜ヶ崎の仲間たちへ——

四年目の6・25がやってきた。七五年の六月二五日、船本戦士（コーちゃん）は、皇太子の来沖を糾弾し、沖縄の大地で焼身自決した。船本戦士は、七二年釜ヶ崎における対鈴木組闘争によって新たに切り拓かれた釜ヶ崎―山谷をつらぬく寄せ場叛乱のなかで、常に先頭に立ち、鋭い問題提起を行なってきた。日帝権力は、このような船本戦士を目の仇にし、釜ヶ崎―山谷の寄せ場叛乱を弾圧し、封じこめるために、爆取のデッチ上げ弾圧を行ない、船本戦士を指名手配した。船本戦士は、このようなデッチ上げ弾圧という困難な状況にあっても、決して屈せず、テキの追及の手をかわしながら、ただ逃げるのではなく、反撃の体制をつくるために戦い続けた。

七五年六月二五日、船本戦士は焼身自決した。「世界反革命勢力の後方を世界革命戦争の前線に転化せよ」と題された最後の檄のなかで書いている。「皇太子暗殺を企てるも、彼我の情勢から客観的に不可能となった。したがって、死をかけた闘争ではなく、死をもって抗議する。……現象的には敵を殺さず、自らを殺す闘い方ではあるが、それは彼我の情勢から考えて見れば、単独者の為しうる唯一の闘い方となった」と。

船本戦士は、第一級の帝国主義者である皇太子を処刑する反日武装闘争の意志をもっていた。しかし、船本戦士をめぐる客観情勢は、船本戦士が反日武装闘争に決起する条件を奪っていた。船本戦士を単独者として孤立化させてしまったのはだれだ。それは、まさに、テキの追手をかわしながら困難な戦いを遂行していた船本戦士のことを知っていた友人たちであり、獄中獄外のオレたちだ。

同じ最後の檄に船本戦士は書いている。「ベトナム革命戦争で殺された無数の戦士たちは、幸運にも生き残った戦士たちの中で生き続けているのである」と。だが、ほんとうに獄中獄外のオレたちの心のなかで、船本戦士は

生き続けているだろうか。オレたちの心のなかで船本戦士が生き続けるということは、まさに船本戦士がなさんとしてなし切れなかったことを、オレたち自身がなし切っていくということではないだろうか。それは、船本戦士の6・25焼身自決を、オレたち自身への戦闘指令として受けとめ、世界反革命勢力の後方（日帝本国）を世界革命戦争の前線に転化していくことではなからうか。

四年目の6・25を迎え獄中獄外のオレたちは、この四年間ほんとうに船本戦士の6・25戦闘指令に応え切れるだけのことをやってきたのかどうかを自らに問いかけ、戦いへ向けての決意を新たにしなければならないと思う。オレたち獄中獄外に問われているのは、反日武装闘争を軸とした総力戦としての反日人民戦線の方向をはっきりと確認し、非公然領域と公然領域の区別（けじめ）をつけ、全体の運動状況を踏まえて、自らの任務をきっちりとおさえ、それぞれ可能な形態で戦闘を開始することだと思う。地下の戦士たちに、二度と、自らを殺さざるを得ない状況を強いてはならない。絶対に。

オレたちは、東アジア人民をはじめとした被植民地人民を踏み台として生活してきた、また現在もしている日帝本国人だ。それゆえ、オレたちは、日帝中樞を武装攻撃する具体的戦闘を軸とした反日人民戦争によって、日帝本国人としての寄生性を自己否定し、全世界の、被植民地人民の戦いに合流していかなければならない。オレたちはこのように考えている。

日本帝国を撃ち滅ぼす反日人民戦争に志願しよう！

反日都市ゲリラ戦を支える広範な非公然支援網を形成しよう。

一九七九年六月二五日

東アジア反日武装戦線KF部隊（準）

【六月九日山谷のマンモス交番のポリに対する攻撃を貫徹して、無念にも捕えられた磯江洋一さんは、六月一九日から六月二五日まで一週間のハンスト闘争を下谷警察と警庁の留置場で闘い抜いた。荒井まり子さん、黒川芳正さん、大道寺将司さんも、この船本戦士決起四年目の六月二五日を、それぞれ東京拘置所の南三舎一階、四舎一階、二舎一階の自殺房の中で、ハンスト闘争をもって闘った。】

日帝の中樞を形成している

侵略企業を攻撃しよう！

ヤマの仲間たち！ 全国の寄せ場の仲間たち！

間組という大手の土建企業があることは、皆も知っていると思う。この間組は、一八八九年に間猛馬によって、土木建築請負業を目的に、九州門司で創業された。他の土建企業がそうであるように、間組も、主要には資本主義の動脈である鉄道建設を請負い、日本人下層労働者をタコ部屋でゴキ使うことによって資本蓄積を行なった。

一九〇二年には、さらにもうけをふやそうとして、下関に本店を設置し、一九〇三年には、創業以来初の海外工事として、京釜鉄道株式会社より京釜鉄道の一部の工事を請負い、朝鮮侵出への足場をきづいた。以降間組は、日帝の朝鮮侵略にびったりと寄りそって、朝鮮における、侵略・植民地支配の根幹ともいうべき軍事鉄道網の建設にたずさわリ、朝鮮人労働者に対する使い殺しのタコ部屋的奴隷労働によって、多数の朝鮮人労働者の命を奪い、巨額の資本を蓄積した。

日帝は、朝鮮における植民地支配をうちかためながら、一九三〇年代に入ると、中国大陸への本格的侵略を開始するが、間組も朝鮮を足場にして、中国大陸へと侵入した。中国大陸に侵入した間組は、抗日・反日バルチザンの武装攻撃を受けながらも、日帝反革命軍に防衛され、中国人労働者に対する使い殺しのタコ部屋的奴隷労働を強制し、多数の中国人労働者の命を奪い、巨額の資本を蓄積した。

一九四一年以降、間組は、日帝の侵略戦争拡大にともない、朝鮮・中国大陸のみならず、台湾・タイ・フィリピン・ビルマへも侵出し、日帝反革命軍に対する全面的な軍事協力を行なった。日帝本国内においても、朝鮮人

・中国人を強制連行し、軍関係工事で酷使・虐殺した。

その一例として、木曾谷の発電所工事がある。一九四四年から一九四五年にかけて、日帝（政府・軍・土建企業）は、中国人捕虜戦士ら一、七一六人を強制連行し、戦力増強のための軍直轄工事である日発水力発電所工事に従事させた。この工事を請負っていたのは、間組・鹿島組・飛鳥組などであったが、これらの土建企業は、中国人捕虜戦士らを、零下20°という厳寒のなか、雪の上を裸足で作業をさせ、冬でも着衣は薄物一枚、寝具はボロボロの毛布一枚しか与えず、食事も、40名がヌカのマントウを一食に二個与えるのみであった。このような苛酷な強制労働と日本人現場監督のリンチによって、多数の中国人捕虜戦士らが虐殺された。間組は、この工事に三七〇人の中国人捕虜戦士らを強制連行し、少なくとも九二人を虐殺した。

このような間組の悪虐非道に対して、一九四五年一〇月、日帝敗北後、中国人捕虜戦士ら約一〇〇人が下刈ガマ、トビロなどを手にして、武装決起した。

一九四五年八月一五日以降、間組は、他の土建企業と共謀して、侵略戦争中の朝鮮人・中国人強制連行・虐殺の責任追及から逃れるために、組織的に証拠隠滅をはかり、逆に多額の国家補償をむしりとった。U S A帝反革命軍の基地工事を請負うことで、戦後の発展の土台を築いた間組は、日帝の新植民地主義侵略の一環として、内戦状態の南ベトナム、ラオス、マラヤ、エルサルバドルに侵出し、現地反革命政権と結託し、革命勢力に敵対した。（エルサルバドルにおいてはロメロ軍市政権と結託し、現在飛行場建設を行なっている）。

マラヤにおいて、間組は、ラザク政権と結託し、マラヤ共産党武装勢力の根拠地を破壊するためのテメンゴール・ダム建設工事を請負った。一九七四年一二月九日、マラヤ共産党武装勢力は、この工事を、マラヤ人民の利益に反する反革命工事であると糾弾して、間組を武装攻撃し、その結果、間組社員が一人死んだ。

われわれ、東アジア反日武装戦線「狼」の「大地の牙」の「さそり」は、この12・9の戦闘を、われわれ日帝本国人への戦闘指令として受けとめ、一九七五年二月二八日、間組本社6階海外事業部、九階電算機コンピュータ室、大宮工場の三ヶ所を爆破攻撃し、さらに連続的に、間組の江戸川作業所にも爆破攻撃を加えた。われわれは、この戦いをキノダニ・テメンゴール作戦と名づけたが、七月二五日の、間組常務取締役宅に対する火災弾攻撃

(残念なことに不発であったが)は、キソダニ・テメンゴール作戦を継承するものであると考えている。さらにさらに間組を攻撃しよう！

日本帝国を撃ち滅ぼす反日人民戦争に志願しよう！
日帝の中樞を形成している侵略企業を攻撃しよう！

一九七九年七月二九日

東アジア反日武装戦線 K F 部隊 (準)

発行日 1979年9月28日

発行 東アジア反日武装戦線 K F 部隊 (準)
(葛飾区小菅 1 - 35 - 1)

連絡先 K Q 通信社 (東京都下谷郵便局 私書箱 99 号)

頒価 500 円